

読者の広場



## ディスクール (discours)

永井礼正

(株) 感性デバイスーズ

Ginza INZ 3 (1F), 1-2 Ginza nishi, Chuo-ku, TOKYO, 104-0061

二十年以上も前のことになるので、その事件を覚えている者はもう誰もいないであろう、純粋に観照的なその犯人を除いては。もっとも、当時の関係者であっても、そもそも事件であったかさえも定かではなかったのだ。

それは、観光地として名高い江ノ島の近くにある小さな高等学校で起こった。年の瀬も近い、ある晴れた冬の夕暮れの放課後、その長閑な時を打ち破るけたたましい爆音が生物実験室から校舎を揺るがせた。「何が起こったのか。」と、多くの生徒や教師が現場に参集するのだったが、皆一様に不思議がるのだった。学校当局の手で、詳細な現場検証がなされたが、恐ろしい爆発物の残骸はおろか、現場付近で壊れたものは何ひとつなかった。ただ、生物実験室の裏庭の実験槽周辺が、川のように水浸しになっていた。付近の人影といっても、化学の授業の追試をしていたと主張する少年が屋上にいたぐらいで、ほかの生徒はみなクラブ活動に汗を流していた。屋上から「何かが投げ込まれたのであろう。」という憶測もあったが、それにしても、あまりにも激しすぎる衝撃であったし、水槽の中にそのような異物は認められなかった。さらに奇妙だったことは、後日出張から戻って以来不機嫌そうにしていた化学教諭が、この不可解な事件を聞かされるやいなや、ひとり何かうれしそうに化学室に向かい、職員室に戻ったときには、なにやら上機嫌に最近導入した pH メータの性能を自慢げに語っていたことであった。

屋上の彼の追試とは、もちろん物理化学実験であった。テーマはナトリウム (Na) と水、そして Newton であり、その試料として、相当量のアルカリ金属が化学室から持ち出され、最終的には生物室の実験槽に返却されたのであった。その石油の中に保存された化学物質は、水面ではじけてしまうことを回避するための天才的なアイデアがその形状として盛り込まれていた。そして、穢れなき悪戯は、5階の屋上から落体の法則に従い、きれいな二次曲線を描きながら、水槽に吸い込まれていっ

たのだった。「美しき哉人生！」

このアネグドートは、実話である。当時は、経済が狂気に満ちた豊かさの中にあり、その時代精神の中で秀才達は、様々なる意匠を持って悪戯をしたものであった。有名だったのは、近隣の県立高校の少年が、鳥の餌から芥子の実を選び出して、学校の裏山で栽培していたことであった。確かな化学の知識の元に大麻を精製し、吸引しようとしたが、「湿気っていて火がつかなかった。」という。教室を抜け出し、水をまいていたところを通報され、彼は御用となるのだが、今は優秀な化学者となっているらしい。

理系の大学の教壇に立ってもう十年以上になる。この間、偏狭な科学青年や理系の大学人が個人として、あるいは集団として、凶悪な事件を起こすニュースを最近よく耳にする。「科学技術は神の手か、それとも悪魔に呪われた猿の手だろうか？」科学の属性に対する理解は、まだまだ、「知識」に留まっているのかもしれない。

“熱エネルギー=エネルギー” という工学的な意味におけるパラダイムからの脱却は、真の意味でのエネルギー革命を意味する。それを妨げるものは、市井の偏狭なる見識であろう。そもそも科学というものとは両刃の剣であり、それを生きてゆくための「知恵」として身につけなければならない。新エネルギー燃料が、その操作上種々の危険性孕むのであれば、すべての構成に対して、細心の注意をはらい、工業技術を養うことにより安全性を確保すべきである。

わが国は、伝統的に精密な工業製品を生産する高い水準を有している。産業構造上、その多くを担っているのは大企業ではなく、層の厚い中小企業であって、この企業層を活性化し、基盤技術の育成をすることが急務である。 Festina lente ! (談)

### 参考文献：

Charles BAUDELAIRE 「けしからぬ硝子屋」 (三好達治訳 『パリの憂鬱』：新潮文庫)